



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本アニメーションの表現性に関する研究：東アジアにおける受容を交えて〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	靳，麗芳
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11950号
Issue Date	2015-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59929
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Lifang_Jin_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 斬 麗芳

主査 教授 応 雄
審査委員 副査 教授 押野 武志
副査 教授 武田 雅哉

学位論文題名

日本アニメーションの表現性に関する研究—東アジアにおける受容を交えて—

一大社会的・文化的現象をなしている現代日本のアニメーションは、近年、国内外の人文科学研究において、とりわけ表象文化研究の対象のひとつになりつつある。本研究の目的は、現代日本の代表的なアニメーション作家の作品を考察することを通して、そのそれぞれの作家性・芸術的特徴を見出し、それらの個性的な特徴を従来の日本アニメーションの表現手法に照らしつつ、現代日本アニメーションの芸術表現における独自性を明らかにすることと、東アジア地域、とりわけ現代中国における日本アニメの受容の実態を考察することを通して、現代日本アニメーションの海外受容において生じたもろもろの社会的・文化的な派生的諸事象を多角的に検討することにある。

これまで当該領域で行なわれてきたアニメーションの表現性に関する議論は、宮崎駿監督といった特定のアニメーション作家に集中して、作品の構成とその時代との対応関係や、物語や映像の細部に込められたメッセージなどに注目する作家論が多かったが、本論文はそのような宮崎駿とジブリ作品に関する考察を戦略的に回避し、宮崎駿ほどメジャーではないものの、強い芸術的個性をもって作品を発表しつづけてきた押井守、今敏、細田守などのアニメーション作家群の作品に注目し、オーソドックスな作家・作品論を行なった。そのかわり、中国をケースとする東アジア地域における日本製アニメーションの受容をも視野に入れた本論文は、主に日本国内の受容状況にもとづき、二次創作などポストモダンともいわれる諸事象をめぐってなされてきた研究がメインである従来のアニメーション受容論とは一線を画し、製作側にのみ、あるいは日本国内の受容状況にのみ焦点を当てるばかりでは浮かび上がってこない多層的な文化表象の諸問題について、詳細な資料調査のもと多角的に検討した。

現代日本アニメーションに関する研究はしばしばサブカルチャー研究に分類され、作品の受容や二次創作の側面に関心が集まる傾向もあるが、本論文はオーソドックスな作家・作品論のアプローチをとり、押井守、今敏、細田守といった芸術的個性をもつアニメーション作家の作品における表現面の諸相貌を吟味し考察した。アニメーションの芸術表現面において個性的な現代アニメーション作家群をまとめて論じた点で、本論文は一定の成果を上げている。次に挙げるべき成果は、本研究が行なったアニメーションの音声についての考察である。映画やアニメーションなどの映像作品に関する研究では、映像についての分析に集中しているのが現状である。いわゆる「リミテッド・アニメーション」の手法を大いに採用した現代日本のアニメーションにおいては、音声の存在感がとりわけ際立つ。そういった日本アニメーションの独特の表現形態を強く意識した本論文は、具体的な場面における音声と映像のマッチングやズレを仔細に分析し、幾つかの作家・作品における音声のナラティブ上の機能について考察を行ない、アニメーション音声論の探索を試みた。

現代日本アニメーションの受容面についての研究は、東浩紀の『動物化するポストモダン』などに代表されるように、「データベース消費」やポストモダンともいわれる「二次創作」といった消費文化の諸現象と現代日本社会の変貌との相関が議論の中心になっている。本論文は、そうした問題意識を東アジア地域における日本アニメーションの受容状況へと視野を広げ、とりわけ中国での受容をケースに、国境を越えたアニメーションがどのように消費され、「二次創作」されて

きたか、また、このことによって日本国内での受容と異なるどのような諸事象が生じたかについて、1980年代以降のテレビ放送やDVDの流通などの状況を整理しつつ史的に検討した。ここでは、台湾も含むアニメーションの吹き替えによって現れた声優の問題にも触れており、海外受容論を行なってこそ浮上しうる、越境する声優論を試みる可能性を示した。

但し、本論文に問題点もいくつかある。第四章では、作品のテーマや物語についての検討がなされているが、芸術表現面についての検討がやや不十分。また、アニメーションの越境をめぐって考察を行なったことは有益であると認められつつも、受容研究と作家・作品研究とのあいだのより内在的な関わりについての言及が不足しているように思われる。さらには、一部の場面分析では、重層的に考察を掘り下げて行なう余地もある。しかし、そういった問題点は、本論文が研究テーマについて広い視野のもとでアプローチした後に新たに生じた課題であり、論文が達成した成果を損なうものではない。これらの課題は申請者がこれから本テーマの研究をさらに推進するきっかけと原動力にもなるであろうと考えられる。

本審査委員会は、以上のような審査結果により、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。